
ひねくれ女子高生は面倒ですが何か？

ローズクオーツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひねくれ女子高生は面倒ですが何か？

【NNコード】

N4570N

【作者名】

ローズクオーツ

【あらすじ】

友達がいない奴をあなたはどう思う？

友達なしで中学時代を過ごし、高校生になつても作る気がまったくない篠崎千遙に近付く同学年の男子・永島龍斗。

龍斗は学年でも無駄にモテやがる奴（千遙・談）で、性格も良い。そんな奴大っ嫌いだ。

そんなひねくれ女子に近付く変わりもの男子の少しシリアスなラブコメディー？

R15をはずしました。ただ小学生の皆さんには千遙の言葉遣いを絶対に真似しちゃダメだよ もちろん中学高校生も。

一話（前書き）

初めての投稿で、少し変な文があるかもしれません。また、学生なので低クオリティーな小説です。

「ねえ、私に近付かないで欲しい。」

その言葉を言つても貴方は私に近付いて来る。

数日前、私は図書館で勉強をしていた。

頭は良い方だが高校に入つても友達は作らず、いつも孤立していた。ちょくちょく話かけに来る人もいるが、本や勉強に集中したいので、適当に話を済ませるので友達となるものはいない。

友人がいなくて寂しい奴と思われがちだが、そんな事はどうでもいい。

高校生活なんてたかが3年程度。

青春を無駄にするな、と入学当時に言われたがむしろ学校に通うのが無駄だと思つ。

勉強なら塾や家でも出来るし、芸術など生活の役に立つだろうか？

こんなことを中学時代に教師に言つたり、ノリコニケーションがどうのひのひの言つていた。

まあ、そんな事だろ。う。

所詮人間は自分勝手に『あの人人がムカつく』『あの人頭がおかしい』
だの陰口を言つたり、最悪気に入らない人を殺したりする。

そんな人間関係だつたら私は嫌だ。

私、篠崎千遙しのざきちはるはものすごくひねくれていて自覚している。
こんな性格が最悪な奴と一緒にいても楽しくないだろう。

だから、自ら他の人と距離を置いていたのに。

まったく、馬鹿で変わっている奴だ。

一話（後書き）

変な文章ですみません。
誤字脱字があれば教えてください m(—_)m

さて、舞台は数日前の図書館となる。

勉強をしていると隣の方に人の気配を感じた。

べつに変な能力は持っていない。私の視野に入つて来たからだ。

そいつは小声で私に話しかけて来た。もちろん聞こえないふり。

そしたら奴は肩を軽く叩いて来た。モチ、無視。

奴はあきらめたのかどこかに行つた。よし、勝つた。
適当に勉強を切り上げ、図書館を出た……、はずだった。

誰かが私のブレザーの襟を掴みやがった。

「ぐう」 と声を上げた私は誰だ、と思いながら後ろを向いた。

…ヤバッ。さつきの奴だ。

驚いている奴は「やあ、やつと気付いたね。」と笑いかける。

そして驚いている私を見て「やっぱり無視していたんだ。どうして
だい？」

「べつに私にはお前に話すことはない。だからやつをと失せん。」

その話し方に驚いたのか奴の手が私の襟を離す。

そりや そうだ。私は今、眼鏡を掛け、制服は着崩すことなくいわゆる優等生っぽい格好だ。
まあ頭は良い方だが。

襟を離した隙に逃げようとしたが、今度は腕を掴まれた。

「待つて、逃げないで。君と同じ学校の生徒だよ。」「そんなの服みりやわかるに決まっているだろつー」「そうだけど。ちょっと話しがあるんだけど……。」

そう言われ私は「王立ちして、3分以内に話せ。簡潔にな。」と言った。

「偉そうな子だな。噂と全然違う。」

「噂はあくまで噂だ。と言つよりどんな噂だ。」

「君は篠崎さんだよね。」「ああ、まあ一応。」

「一応つて……。えつと対人恐怖症で気が弱い。孤立していく成績が良い。……みたいな？」

「後半は合つているが前半が違う。べつに人と話すのは全く怖くない。」

「あと俺と話すかぎり気が強い。」

「……。」

「ああ、じめんじめん。」

私が傷ついたような顔（演技）を見て慌てて謝つてくれる。

「で、用件は？」

ケロッとした顔でそう言つと、悔しそうな顔をする。「演技か……。

ああ失礼だけど君つて親しい人とかいないよね。」

「まあな。べつに気にしていないが……。」

「じゃあ友達になろ」「

「断る！」

「え！即答！なんでー・ビーフしてー！」

「テンションがウザい。あと、『なろ』って言つたときのマークがムカついた。」

「友達になろう。」

「普通に言つても駄目だ。じゃあ、バイバイ。」

「あつ、待つ……。」

腕を振りほどいて私は走り出す。

幸い図書館から駅まで近いのですぐに階段を駆け上がり、振り返る。

奴は追つて来なかつた。

「はあ、はあ……。よかつた。」

私は息を切らしながら電車に乗つた。

電車は空いていたので座ることが出来た。

それにも……、今日は疲れた。

だつてテンションの高い馬鹿に絡まれ、拳げ句全力疾走だもん。

もうヤダ、泣きやう。

…… そりいえば奴は私と同じ学校つて言つてたな。
でも今日パツと会つただけだし、話しかけられたら無視すりやいい。

そり自分で納得し、ちよつと降りる駅に着いたので電車を降りる。

駅の中の本屋で参考書を探す。前から欲しかった本はなかつたが、
新作の参考書が出ていた。

どこかの有名大学の教授が書いた英語の参考書であった。
興味が出たので、買つてみるとこにした。

店員に金を払い、商品をもらつ。少しバラバラとめぐり内容を確認
する。

結構簡単な感じだったが丁寧に解き方などが書いてあり、なかなか
良い本だ。

家に帰つてじつくつ読むことにした。

最寄駅から5分ほど歩くと私の家がある。

駅が近いので多分土地は高いだろうな。

私には関係ないがな。

さて、家に着いた私は鍵を開ける。

「ただいま。」と、言つても誰もいない。

私には物心ついた時から母親がいない。

父親から聞いた話しだとなんか離婚したっぽい。

まあ、父と母はその程度の関係だったのだろう。

私は母親に会いたいとも思わない。

そんな私だから性格は最悪なのだろう。

といつあえず私は適当に洗濯物を取り込み、夕飯の下ごしらえをする。

家事は割と出来る方だと自負している。

あらかた家事を終わらせた私は買って来た参考書を開く。そして勉強をやり始めた。

2時間ほど勉強してから腹が減ったので、夕飯を食べた。

父親はいつも夜遅くに帰つて来るので、ラップをかけておく。

腹が満ちたので少し眠くなつたが、明日も学校なのでシャワーを浴びる。

風呂に浸かると水道代がかかるし、少し面倒だ。

髪を乾かし、明日の授業の準備をする。

特に見たいテレビ番組もないし、友達がいないので電話やメールのやり取りもないし寝よう。

ベッドに入り目覚ましを5時半にセットする。

ベッドが私の体温で温かくなつた頃、私の意識は飛んだ。

ジリリリリリ！

不快な目覚ましの音が私の耳に入つて来る。

手を伸ばして音を止める。

時計を見ればちょうど5時半で私は起きなければならぬ。

顔を洗い、口をすすぐ。

台所に行けば、空になつた皿が机に置いてあつた。

それらを洗い終わらせて洗濯物を洗濯機に入れてから弁当を作る。

朝食は弁当の余り物を適当に食べた。

食べ終わつてから歯を磨き制服に着替える。

洗濯が終わつたらしく洗濯機からピーッと音が鳴る。

洗濯物を干し、外を見れば太陽が少し顔を覗かせていた。

今日は晴れそうだ。

そう思いスクールバッグを肩にかけ、革靴を履き家を出た。

うつとうじいほど朝日が降り注ぐ道を、私は駅に向かつて歩き出した。

駅に着いて改札口に定期を入れてプラットフォームに入る。

電車は数分後に来た。やや混んでいたが、空いている座席が一人分あつたので座る。

何駅か過ぎてだんだん学生やサラリーマンが多くなつてくる。

サラリーマンの中にものすゞく疲れている感じのおっさんがいて、ちょうど私の前に来て『俺疲れていますから座席譲つて下さい』アピールしていたが、無視する。

私だつて疲れているんだ。

そう思つているとおっさんのアピールが終わつた。

つづづく思うが私つて性格最悪だな。たぶん結婚とか出来ないタイプだよ。

ほら、男子とかつて優しい子とか気遣いが出来る子が好きな人多いし。

まあ恋愛とかどうでもいいしな。

そんな事を考へていると降りる駅に着いた。

さて、学校に向かうか。

学校に着いた瞬間、少し油断していた事を私は後悔した。

教室に入ると昨日の奴がいきなり現れた。

「……」

「おはよ。昨日はいきなり逃げるなんて酷いな。」

と、奴は言つ。そして……

『ビシッ』

額に小さな衝撃が走る。『ヒ』とポンされた。

「……」

「お仕置きだよ。人に話しかけられたらちやんと答えようね。」

「知らない奴に話しかけられたら逃げろって習つていいが?」

「ちやんとこの学校の生徒だつて言つたじやん。」

「同じ学校つて言つても知らない奴だし!」

「俺は3組25番の永島龍斗です!」

「『』寧にありがとよーでも今やる』じじやねえ。」「龍斗つて呼んで。甘える感じで」

「断る!」

ギヤーギヤー騒いでいる他の生徒の視線が私達に向けられる。

そりやそうだ。私はほとんど騒がないし、言つて争つている相手はそれなりに美形だ。

女子が少し陰口叩いたの聞こえた。つたく女子は。

騒ぐのに夢中で時間が確認出来なかつたが、ある程度時間が経つた

のだろう。

S H R が始まる5分前のチャイムが学校内に響き渡った。

永島つて言つヤロー、「じゃあね。」と言つて、自分の教室に戻つた。

SHRが終わった後後に更なる災難が降り注ぐ。

「ねえ、永島君とどういづ関係？」

そんな質問の嵐だ。

よくある『私たちのイケメンに地味な女が話すんじゃねえよ。』的な感じだ。

「永島つて……？」

「朝、あなたと話してたじやない。じほけないで。」「ああ、べつに他人? だと思つぞ。」

「じゃあ……つ」

「千遙つー！」

私の名前を無断で呼び捨てで呼ぶ声が聞こえてきやがつた。

すると、私の目が眼鏡の上から塞がれる。

「だ～れだ！」

「ハイテンション馬鹿?」「ハズレ!」

「じゃあ、いろんな意味で変態野郎?」

「ハズレ! つてなにげに酷いこと言つな。」

「私から見たお前の印象だからしかたがない。」

「……つーまあそれは置いといで。」

「置いておくんだ……。」「そついえば、用件があつてね……。」

「なんだ?」

「友達になろうか。」

「ことわ……つて昨日断つたけど。」

「答えが変わると思ったから」

「変わらねーよ。」

ぴしゃりと叩きつけるように奴に言った。

いい加減私にかかるのをやめて欲しい。

そしたら、

「だつて君に興味持つたんだよ。明らかに他の子と違うし面白そう。」

「その興味の対象を勉強に向ける！成績上がるぞー。」「そうじゃなくて……。」「じゃあなんだよー。」

ゼエゼエと息を切らし私は言つ。

奴はそんな私を見て私の頭を撫でる。

「触るな！」「いいじゃん。大型犬に威嚇する小型犬みたいな？」
「はあ？」

まさかの発言に驚く。小型犬？まあ私は奴に比べると小さい。

でも、人が一生懸命断つているのに。

「とりあえず……。」「はあ……なんだ？」
「メアド交換しよう」「ケータイ持つてない。」「じゃあ胸ポケットに入っているものは

何かな？「

「あつ……。」

クソつ……胸ポケットに入れるんじゃなかつた。

「じゃあ……。」

「あつ……。」

私のケータイを取り赤外線通信らしいもので勝手に交換をしてしまつた。

八話（後書き）

少しずつですが読んでくれる人が増えて嬉しいです。
投稿数は日によって変わります（ ； ）

無理矢理メアド交換した後の休み時間、私にこれ以上ないくらいの災難（質問攻め）が降り注ぐ。

「メアド交換までしてただの他人とは言わないでしょ。一体どんな関係？」

「知らねーーー！」

いきなり私が怒鳴ったのでさつきの質問攻め女子が怯んだ。

「さつきのやり取り見てたよな？私はべつにやりたくてメアド交換したわけじゃないの！いい加減気づきなよ。あっちが一方的にこっちに来ているの。だから質問するなら向こうにいきやがれ！！」

ついついカツとなってしまった。相手の女子はびっくりした顔で私を見てた。

ついでにクラス内は困惑した雰囲気に包まれていて。（ヤバい。すぐ気まずくなつた。）

私がどうするか悩んでいると、授業始まりのチャイムがなつた。

とりあえず授業が始まるからひとまず大丈夫だな。急いで教科書やノートを出し、授業開始を待つことにした。

……次の休み時間どうやって過ごしそうか。

今日の授業が全部終わる頃私はぐつたりとしていた。

「はあ……。」

他の休み時間は質問が来る前に図書室や、自習室に逃げた。

私のクラスから結構遠いんだよな……。

すると、

「疲れているようだけど大丈夫?」

そんな言葉を言われた。

朝の質問攻めしまくる女子ではない。入学当初から話しかけて来る女子だ。

学級委員の早川美咲はやかわみさきといつも前うらしい。

「ああ、大丈夫。とりあえずな……。」

「篠崎さんがあんなに話していたの、初めて見た。」「いや、出来ることなら今日のことは忘れて下さい。つーか忘れる。」

「……初めてこんなに話してくれるんだね。いつもは『……うん』もしくは『無理だ』とか『yesかno』を答える程度だつたのに……。」

「

クソつ……。迂闊に話し過ぎた。

「じゃ、じゃあ私は帰らないといけないから……。」「えつ、ちよ
つと待つて。篠崎さんつて勉強出来るよね?」

「…………、じゃあね。」

「あつ、待つ……。」

脇田もふらず私は逃げ出した。…………が、

「人が用件を話さうとしてるのに逃げちゃ駄目だよ。千遙」

どこからか湧いた馬鹿に手を掴まれた。

昨日の事を思いだすな……。

「面倒だもん。だから手を離せ。」

駄目。ちゃんと人の話を聞きましょー!」

「わかった!もう逃げないから……。」そつ言つたら、手を離してくれた。

「なんの用だ早川さん。出来る事ならさっそく終わるような事で……

……」「勉強教えてくれる?」

「参考書を読もう。もしくは先生に教われ!」

「でも……。」

「はいっ、これ。昨日買った参考書。」

「いらっしゃる千遙、教えてあげなさい。あと俺にも教えて欲しいな」

「オススメ参考書パート2とパート3だよ。ハイテンション馬鹿にはパート4からパート7まで貸そう。」「参考書じゃなくて、直接教えてよ。」「断る……」

結構しゃべつて疲れた。そんな私を見て早川さんは、
「あつ、じゃあこれで大丈夫だから。ありがとつ篠崎さん。」

早川さんは引いてくれた。でも、

「俺にはきちんと教えて。…………優しく一対一で。」「気持ち悪っ！」

俗に言う甘い声？とやらで耳元で囁かれる。多分他の女子なら顔を真っ赤にしたりするだろうな。

でも私にはそんな可愛いいげは全くない。

以外な反応だったのか悔しいそうな顔をした。

その顔を見て私は少し勝ち誇った顔をした。

「ふがつ！」

「駄目だよ。人が少し落ち込み気味なのに…………。」

鼻をつままれた。

「全く、本当に意地悪な子だなあ。勉強くらい教えてくれたっていいじゃん。」「私にメリットは？」
「教える能力がつくよ。」「必要ない。」「必要だよ！」

ああ、長い。やり取りが長すぎて疲れた。

長いやり取りをなんとか終わらせるために、仕方がないので図書館で勉強を教えることにした。

「じーは？」
「それは×が〇になるように代入すればいいだろ馬鹿野郎。」「……？どうやって？」「教科書見れば。」「何ページ？」「62ページ。」

それにして……、どうして基本問題が出来ない？

「めんどくさい。」「そんなこと言つなよ。あつ、チヨコあげるよ。」「こりない。」「えつ！君つてチヨコ嫌いなの？」「……。」

チヨコは嫌いではない。むしろ大好きだ。ただ勢いで言つてしまつた。

「そんなことより勉強に集中しろ……。やるやく帰るからな。」「ええつ、もつ？」「やつぱり今すぐ帰るから。」「じゃあ問14が終わるまで。」「……。」

面倒なので参考書を開き「じーはりや分かる。」と書いて私は帰る準備をした。

奴は参考書を見て、「じんなのじゃ分からない。教えてよ。」と

言つたが、無視する。

さて、駅に向かうか。

図書館なのに騒ぎ出す馬鹿は他の人に注意を受けている。

その隙に図書館の出口に向かった。

十一話（後書き）

感想・評価があればお願いします。

なんやかんやで家に到着した。

家に帰る途中、外国人観光客に道を聞かれた。

……英語だつたがほとんどわからねえ。

仕方ないだろ。英会話は苦手だ。

「お前の英語は理解するのが不可能だ。」と日本語で言つてその場を去つた。

薄情な奴と言われようと私にはどうでもいい。

まあとりあえず家に着いたので家事を済ませる。

ほとんど昨日と同じような事をしていながらいつもの習慣なんだ。仕方ないだろ。

ふう、と一息ついてみるとケータイがなつた。

奴だ……。

とりあえずケータイを見てやる。メールが届いた事を知らせるとんちんがついている。

メールには……、

『どうして帰つたの？まだ勉強途中なのに（・・・）』

と、書いてあった。無視しよう。

シャワーを浴びた後、またメールが来ていた。

『無視するな』（Ｔ－Ｔ）返信しなさい！
『こいつ女か？

20分くらいたつてさらにメールが来た。

『寂しい（Ｔ－Ｔ）ウルウル。構ってくれないと死んじゃう
ウサギ気取りか？

とつあえずだるいので寝よう。メールは放つておくことにした。

メール拒否するこほどひどいやつてやるんだ？

今日は初めて寝坊をしてしまった。
まあ、学校は遅刻しなかったがな。

とりあえずギリギリな時間に教室に入つて来たので奴に会つことはなかつた。

……今度からギリギリに来るよひにじょうかな。

そんなふうに考えていると先生が教室に入つて来た。
先生は連絡事項を話してから教室から出る時に、「篠崎、後で話しがあるから職員室に来い。」と、言われる。

大概ね奴なら怒られると予想するだらう。

だが私は悪い事は一つもやって……、怒られる用な事は多分やってない。

昨日外国人放置したが……。

とりあえず職員室に向かつことにした。

職員室で先生に、「話はなんじょうつか?」と、用件を聞いた。

「ああ、篠崎は今一年のなかでトップだったよな。しかも、入学

してからその座を誰にも譲りず。

「はい。」

成績に関係する話か？

「それで頼みたい事があるのだが？」

「何ですか？それは成績に関係しますか？関係しないのでしたら断るつもりですが？」

「なつ！」

「どうやら成績に関係なさそうだ。私は自分にメリットがなければ頼みを受ける事が大嫌いだ。

「そう言わず、クラスメイトのためにやつてくれないか？」

「……、私は別にこのクラスに入りたくて入ったわけでもない。

「何をするのですか？」

「勉強の仕方のコツをクラスのみんなに教えてくれないか？お前は頭が良いが他の生徒はそうでもない。前のテストでは平均点が他のクラスに比べて一番低かったんだ……。」

「それは生徒のやる気の問題じゃないんですか？もしくは先生の教え方が良くなかったのでは？」

先生は口ごもる。

「じゃあ篠崎はいつもどうやって勉強しているんだ？参考程度に聞きたい。」

「いつも参考書を読んでいます。」

「それだけか？」

「はい……。」

勉強の仕方なんか人それぞれだろ。いつまでこんな話し聞かされるんだ？

「先生。もうすぐ授業が始まります。教室に戻つて良いでしょうか？」

「わかった。いいだろ？ 今のことできればもう少し答えてくれるかい？」

「…………わかりました。」

とつあえずこの場をしのぐ言葉を言い、私は職員室を立ち去つた。

自分で勉強教えればいいのにクソ教師と、私は呟く。

私が戻つて、少ししたら授業の始まりを告げるチャイムが鳴る。

化学の授業だ。

化学はかなり得意だ。と云つより、理数が得意と云つたほうが良いだひつ。

あとは社会などの暗記も得意だ。

英語や現代文が少し苦手だ。まあ、それでも理数と比べてだ。

とりあえず化学の教科書を開く。今日は酸と塩基についてだ。

ぼんやりとしていると、先生に問題をあてられる。

……もちろん完璧に答える。

先生は「よろしく」と、少し悔しそうな顔しながら云つた。

私に恥をかかせようとしたみたい。百年早いぜ。

ある程度時間が経ち、チャイムがなつた。授業が終わりだ。

先生は皆に宿題プリントを配り、教室を去つた。

休み時間に図書室に行こうか迷つていると……、後ろから抱きしめられた。少し苦しいぞ。

「……なんでメール返さないんだ。」

怒りが籠っている声。何故か言い返す言葉が出なかつた。

「べつに……、いいだろ? ビリでもいい内容なんだから。」

「ビリでもよくなーい! ……」「……つー。」

私はなぜかこの男の怒りが怖く感じてしまつ。ただの馬鹿が吠えて
いるだけなのに……。

「千遙?」

「すまない……、場所を変えてもらえないか?」

「……わかった。」

私達は教室から出て、人がいないような場所に移動する」とこした。

十四話（後書き）

ユニークが100人を超えた。

こんな小説を読んでくださいありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。o(^ - ^)o

十五話（前書き）

今日ちやんと投稿出来なくてすみませんm(—)m

私達は自習室

「…………。」「…………。」「…………。」

空気が重過ぎる。

「あの……。」「

「どうして人を無視したりするんだ。」「

「ひう…………。」「

自分が情けなさ過ぎる。こんな奴に説教されるなんて。

「あのな、俺は好意を持つて君に接しているんだよ。きちんとその好意は受け取りなさい。」「

「……余計なお世話だ。」

私は上目遣いで奴を見ながら苦し紛れにそう言った。
そんな私を見て奴はため息をつく。

「千遙、どうしてそんなにひねくれ者なんだ。そんな態度じゃせつかぐの青春がだいなしだよ。」「

「青春なんていらないし、もひほひといつよーーー。」「

すうっと息を吸い、言い放った。

「ねえ、私に近付かないで欲しい。」「
そう言つた時、私の頬に涙が伝づ。
悲しくない、痛くない、苦しくない。」

そのまゝなのレ.....。

私はいい歳のはずなのに泣いてしまった。しかも奴の田の前で。

奴は私の頭を撫でる。まるで泣いている小さな子供をあやすよつた。

涙声で「なんで私に関わらうとするの~放つておこしよ……。」

奴の口が動く。

「やんなこと言つたな。千遥は俺になんで関わって欲しくないの?」

粗手の言葉に怒りは無かった。代わりに慈しむ心がやせりついた。

とっくに休み時間は終わっている。でも、そんなことを気にしていられない。

息を整えて私は言った。

「私は性格が悪い。付き合つても何も楽しくない。だからわれわれ距離を置いてあげているの。感謝しなさい。」

それを聞いた奴は悲しそうな顔をする。

「悲しい奴。」

「……ええ、まあ。」

「お前、面倒だな。」

「面倒ですかにか?」

少しおどかながら私は言った。まあ、お前はどんな反応をするんだ?

奴は何も言わなかつた。無表情で、感情を無へしてしまつたようだ。

そして「千遥はそんなこと言つて辛くない?無理をしてない?」と、言つた。

「辛くない……よ。もうやめよう私行くね。疲れちゃつた。」

私は立ち上がり、教室に向かう。それを奴は呼び止められることになかつた。

やつぱりこんな奴にかまいたくないもんな。

なんで私は……こんな性格になつたんだ?

十六話（後書き）

最近ネタが浮かばない。

ヤバい……。

千遙「作者は私と違つてアホだからな。国語の期末試験の点数なんて6……」

龍斗「ダメだろい。作者の傷口に塩を塗つたら。千遙だって国語苦手だろ?」

千遙「前のテストは94点だったが?」

作・龍「……。」

千遙「まあ、馬鹿とボケはまつといつてこれからもよひしへな……と、台本に書いてあつた。」

（泣）元気でいらっしゃる様子で、お願いします……本当に泣

十七話（前書き）

千遙「どうでもいい話だが私達は高校一年つていつ設定だ。」

作者「千遙さん……、設定つて言わないで（泣）」

千遙「馬鹿のくせに私の名前を『安』く呼ぶな。」

作者「…」

教室に戻つてみたらまだ授業はやつていた。

先生に何故遅れたのか聞かれたが、「自習室で氣分が悪くなり、休んでいました。」と、言つたら「まあいいでしょう。」と私に席に着くよう促す。

それなりに授業は進んでいたが、問題はなさそうだ。
ノートを開き、黒板に書かれている内容を[写]す。

隣の席の男子^{チャラい}が『サボりか?』と書かれた小さな紙を私に見せる。
私はメモ帳に『まあな』と、書く。

『以外だな』と書かれた紙が戻つて来る。
『まあ、アホなお前と違つて理由がしつかりあるサボりだがな』
と、書いて見せると眉間にシワをよせ、『アホじやねえ、じゃあ理由教える』

……無理に決まつてゐるだらう。

だつて自分より馬鹿な奴に説教されて挙げ句泣いた、て言つたらプライドが……。

『お前に言つ必要性は全くない』と書いて見せ、その後はもう相手から来る紙を無視した。

十八話（前書き）

龍斗「そういえば今日ってクリスマスイブだね。」

千遥「そうだな。」

龍斗「何か予定ある?」

千遥「バイトだ。」

龍斗「えつ！」

千遥「こうこう行事は稼げるから嬉しいぞ。」

龍斗「……。」

皆さん、楽しいクリスマスを願います。（リア充以外の方限定）

……授業が終わってから筆記でやり取りした男子が私に話しかけてきた。

名前は高嶋風雅たかじまふうがと聞ひびひこ。

髪の色は田たがチカチカしそうな金髪で、えげつないほど着崩した制服。いんなのが女子どもにモテるから世も末だ。

「篠崎ちやんって真面目まじめに見えるけど意外な面があるんだねえ。

「えむりかと聞えば」ひみつのせつが素すだが?

「くえ……。」

筆記だとわからなかつたがここつは大体語尾が間延びする。

バカっぽいな……。

「用件はなんだ、お前に関わつてこる暇なんかほんとんどない、わいつとしひ。」「いやあ、だいぶ言葉遣いがきつくなつて来たねえ。」「わいつとしひ生なま」ミミが一燃やすぞ。」

「凄いこと言つたなあ。用件はなあ、今度合あコンヤるんだだけども、来てくれるかなあ？」

「断る!」

「気の強い女が好きなイケメンがこいつだぞ。」「だが断る!」

「！」

私はそつとつたが奴は引かない。「見学程度でいいからあ。」とか

「マジでイケメンばかりだぞ。」 など言つた。

「他の子誘いなよクズが……。」

「俺にそういう言葉を吐ける女子はお前くらいだよ。」

「……。」

「もしかして好きな奴とか彼氏いるの?」

「いないに決まってるリサイクル不能ゴミが。」

「じゃあ決定なあ。場所はカラオケ『Let's Song』だからなあ。時間は今日の4時からだから。」「ちよつとまって……私は行かなねえ」「じゃあなあ。」「オイ!」

と、勝手に奴は言つてどこかに行つた。

クソつ何なんだ。男難の相でも出てるのか?

……そうだ、先生に朝の件断りに行かないと。

十八話（後書き）

千遙「…………。」

龍斗「…………。」

千遙「わっから機嫌悪いな。」

龍斗「…………。」

千遙「黙りこむな。しうがねえからプレゼントをやひつ。感謝し

る。」

龍斗「何?何をくれるんだい」

千遙「参考書セツト中学の分だ。」

龍斗「…………。」

千遙「…………あれ?」

十九話（前書き）

龍斗「クリスマスだ～！」

作者「…………。」

龍斗「…………小説の主人公がいないんだけど…………。」

作者「バイトって言つてただろ馬鹿が。」

龍斗「作者まで性格悪つ！何のバイトかな？」

作者「しらねえ。」

龍斗「…………。」

職員室に入ると先生が「考えててくれたかい?」と期待を込めた声で言つてきた。

「残念ながら私は答えを変えるつもりはないです。他の……、例えば2番目に頭がいい人とかではダメなんですか?」

「……、この前の期末試験でほとんど満点だったそうだな?」

「はい。国語以外は。」

「苦手と言つている国語も90を超えていただろ。2番目の人の得意科目と同じ点数だ。」

「なるほど、私より下は差があり過ぎるんですね。」「最近この学校の学力が落ちている。特に私のクラスが。だが、君は今まで学年首位を誰にも譲つていかない。頼む……、他の子に勉強のコツを教えてくれるか?」

「先生が教えればいいんじゃないですか?そもそも教師つてそれが仕事ではないんですか?」

「……、何回かやつてみたよ。でも最近の子はだいぶ強情で、その上親御さんが……。」

「とにかくうるさい人が増えていて、先生が補習みたいなことをやると色々大変で、だけど級友が教えれば問題ない、というわけですね。」

「……ああ、情けないが。」

「すみません、最近忙しくて……。」

「……いや、こちらのほうがすまない。無理を言つてしまつた。」

先生に一礼し、職員室を出た……瞬間、「千つ遙ー!一緒に帰ろう

」

……、何故ここに来た。

「千遥は電車通学でしょ、俺もだよ。だから一緒に駅まで行くの。」

「ちよつとまで、ちつとまでの変な気まずさはどうした。」

「べつにいいじゃん！そんなことより私は用事があるんだ。」

「何？俺も付き合つよ。」「合コンだ。」

……、また変な空氣になると思つたが、嘘はついてない。

奴は驚いた顔をした。「ええ…合コンするんだ！」声がデケエ。職員室の前だぞ。

「悪いか？まあ強制されただけだがな。」

「……ふーん。」

「？」

なんでそんな顔するんだ？

「千遥は彼氏欲しいの？」「全然。どうした？」

「いや……まあ。」

「？」

なんかよくわからないが、不満げな態度だ。

「誰に誘われたの？」

「私のクラスの……高嶋って言つ奴。」

「金髪の人だよね。」

「まあな。」

「断つてあげようか？」

「ああ、べつにいい。」

「なんで？」

「いや、私からしてみてはお前になんでか聞きたい。」

「千遥がいやかなつて思ったから。無理強いするのは良くない」と

だし。」

「まあ、面倒がしようがねえ。」

「……。」

黙りこんだよこの人。なんで？

「千遙つて、少し馬鹿だね。」

「なつ、聞き捨てならねえ。どじが馬鹿なんだ。」

「……。」

「オイっ、黙るなー！」

心外だ、私が馬鹿に馬鹿と言われるなんて。

奴にどじが馬鹿か聞いたとしたが奴は黙りっぱなしだった。

十九話（後書き）

龍斗「サンタさんからプレゼント貰つた？」

作者「貰えるわけねえ。」

龍斗「…………。」

……胸糞が悪い。私が馬鹿にされた。

まあ、とにかく合コン会場に行つてやるつではないか。

とつあえず私はカラオケ『Let's Son』とやらにて来てみた。すると「やあ、ちゃんと来てくれたんだあ。」と、高嶋が来た。

……その格好はなんだ。軟派な格好しやがつて。

「制服のままなんだねえ、だつたらスカート短くすればあ？」

「余計なお世話だ。」

「まあ、いいよお。じゃあ行こうつかあ。みんなもう入つてゐからあ。」

「ずいぶん早いな、4時までもう少し時間があるだよ。」「まあみんな舞い上がつていたからねえ。」

……不思議な奴らだ。

「そうだ、君のメアド教えてえ。」

「断る。」「まあべつにいいけど他の人もたぶん言つよ。」

「全部断る。」

「結構しつこい人もいると思つよ。」

「だが断る。」

「……、じゃあ行こうかあ。」

とつあえず合コン会場内に私達は入つて行つた。

カラオケは初めてだが、変な感じでもないな。ちょっとうるさいやつだが……。

まあ、初体験といつことで大目にみてやるやつ。

一一一 話（前書き）

今日はバイトでこの話しか投稿できません（――）

Side 龍斗

最近不思議な子を見つけてしまった。

見た目は真面目やうなのに言葉遣いがきつこいもほどがあるナ。なんというか……、考えがひねくれていいのかな。だけど頭がものすうぐいいいらしい。羨ましいな。

仲が良い人は誰もいないうらしい。ならば俺が友達第一号になつてやる。

きっと今まで寂しかったからひねくれ者になつてしまつたのであるう。

だけど俺が友達にならひつとも拒否される。なんでだ？

自分で言つのもあれだが顔は整つていいほうだし、話も面白こつてクラスメイトにも言われた。

それでも嫌悪感丸出しの顔して断る。

……軽くショックだ。

まあ、それでも頑張つたら勉強教えてくれたり（途中で帰つちやつたけど）メアドも交換したし、友達っぽいよね。

早速メールをしてみた。もしかして恥ずかしがり屋で直接本音を言えない子なのだろう。

きっとメールを見て返信してくれるはずだ。

……、返信が来ない。

なんでだケータイの使い方がわからないのか？それはないだろ。

もしかしてわざと……少し有り得る。

本当になんで返信しなかったのか次の日、聞いて見た。少し言い方が怖くなってしまったが案の定、焦った様に答えた。

やつぱり無視していたみたい。……。

とりあえず何故こんな態度なのか聞いてみようと思った。

場所を変えて欲しい、と言われてとりあえず白壁室に行つた。

白壁室では色々言われた。そして……、

「面倒ですがなにか？」

涙声でおどけながら俺に言つた。

様子を伺つよつた上目遣いで俺の反応を見ている。

俺は無表情になつた。

その反応を見てどう感じたのかわからないが、教室に帰ってしまった。

俺は、その様子がとても悲しそうだった。

……よし、次会つたら明るく接してみよう。

ちよつゞ授業が終わつて千遙を探すと、職員室から出て來た。

ラッキーと思いながら一緒に帰ろうと誘つ。

だけビ……、合図に行へりじ。

なんでだ、彼氏でも欲しくなつたのか？

そう聞くと「全然。」と歸つて來たことにホッとした。

誘われた人が誰か聞くと、どうやら高嶋風雅に誘われたらし。

風雅か……。面白い子がいると大体誘うんだよな。

風雅とは腐れ縁だからこの子の代わりに断つてあげようかな、と思つたがべつにいいと言われてしまった。

納得いかないな。だけどあまりに突つ掛かると変に思われる。だから……、

「千遙つて、少し馬鹿だね。」

そんなことを言つてみたら千遙は少し怒つた反応をした。

理由を聞かれたが、ずっと黙っていた。

会場に入ると私服の奴と制服の奴がいた。制服の奴は同じ学校と、隣町の学校のものらしき学ランだ。

私達の学校は男女共、紺色のブレザード。ただ女子のはジャケットに近い。

男子は青系のネクタイに少し濃い灰色っぽい色のスラックス。女子は青系のリボンに青系のスカート。そして黒のハイソックスだ。デザインだけはいいので、私立に間違われることがあるが公立だ。偏差値は上の中だったが、最近落ちているらしい。

まあ、関係ないがな。

とりあえず自己紹介をしろと言われた。

「私は篠崎千遙だ。質問があるなら受け付けてやりますではないか。やや傲慢な感じになつたけどまあいつか。

「はやたけ早田慶だよ。よろしく。

真ん中に座つていた男子が名乗つてから他の男子も次々名乗る。

なるほど、高嶋が言つていた通りそれなりに美形揃いだ。

他の女子なら泣いて喜ぶだらうな。

集まつていた女子が、男子が自己紹介を終わつたのを確認すると、自己紹介を始める。

女子達も顔のレベルが高い子ばかりだ。

……私への当てつけか？さつさく『ミミ』扱いしたから平凡な顔の私への復讐か？ふざけんじやねえ。

とつあえず一番入り口に近い方の席に座る。

高嶋が歌い始めた。恋愛ドラマの主題歌らしい。

臭い台詞が並べられていて聞いているこっちが恥ずかしい。

ぼんやりと聞いていた二つの間にか早田が私の隣に来ていた。

I (十一話) (前書き)

更新を忘れてたorz

「千遙ちゃんは何が食べたい？」と、メイコーを見せながら早田は言った。

メイコーには色々書いてあった。が、それにしても高いな……。

「ああ、このチヨコレートの詰め合わせ?がいい。」「わかった。今頼んであげる。」と、書いて電話のよつたな機会で注文した。

「チヨコレートが好きなのかい？」

「まあな。」

「そつかあ。ねえ、一緒に歌おつー。」

「断る。」

そう言つたら相手が驚いた顔をする。

早田は割とインテリ美形と言つた感じだ。まあ、インテリかどうかは知らねえ。

すうつ、と調子を戻し「じゃあ雑談しよう。」と、言つた。

「それならいいだ。」

「千遙ちゃんはこの近くの公立の高校だよね。」「ああ。」

「へえ、僕は藤谷大学附属高校だよ。」

「ほつ、この市内で一番の進学校か。」

「うん。」

私達の学校は県立東高校と言つ。東と書いて（あずま）つて読むらしこだ。

東高校もそこそこ有名な進学校だが私立には勝てない。

藤谷大学附属高校は市内、もしかしたら県で一番の学校だ。コースがあり、一番下のクラスでも私達の学校よりちょっと下程度の学力だ。

私は受験の時、滑り止めで受けた。もちろん敗かつたが、公立に受かつてしまつたからやめた。

「俺はどちらかと言えば公立に行きたかったな。」

「どうしてだ？」

「だって校則緩いじゃん。楽しそう。」

「……でも逆に変な奴も多いぞ。」

「例えば？」「意味不明な金髪野郎。」と、言つて高嶋を指差す。

早田は高嶋を見て爆笑する。

他の女子としゃべっていた高嶋は怪訝な顔をする。

「確かにこっちには金髪がいないよ。」

「そりや、そんな奴いたら即停学だろ。」

「たぶんね。」

少し雑談していたら「『注文の品をお持ちしました。』と、店員らしき人がくる。

私が注文した物の他に唐揚げやポテトなど大人気向けの食べ物が運ばれる。

とりあえずチヨコレートに手を付ける。

うん、まあまあだ。

むぐむぐと食べていると他の人もチョコレートに手を伸ばす。

割り勘らしいので色々食べないと損だ。

さつき雑談していた奴も唐揚げにかぶりつく。

脂が滴つていてなかなか美味そうだ。

初めての企画はとりあえず色々食べていいからさう。
私はチョコレート（8個田）を食べながらそう思った。

I-11-11話（後書き）

年末年始はもしかしたらなかなか更新できないかもしません。

I. 11-回路（複数ルル）

あけましむねむでじいじゅこまか。 (< - >) 。

更新を再開します。

「ねえ、そんな地味な子より私とお話をしません？慶君。」

失礼にもほどがある言葉を言いながら早田の隣に座る女がいた。

確かに浅倉椎奈つていう奴だ。

早田は苦笑いして、他の女子が「人を侮辱してはダメですよ。本当の事でも。」と、明らかに私へ喧嘩を吹つかける言葉を言った。

……殴つていいかな？

人がせつかく耐えていたのに、「邪魔ですわ、身の程をわきまえなさい。馬鹿女！」

……。

「オイ、やめろよーかわいそつだー」と、早田が言った。

「女つて恐つー」と金髪馬鹿が言つ。

「…………なあ、少し言つていいかな？」

「何よー。」

「うわー、やつぱにつづつ女嫌だわ。男子めつちや引つてるわ。

「どうでもいいけどなんで私が馬鹿女なんだ？頭は良いほつだ。」「やつづつ事じやないわよ！貴女が慶君と全く釣り合つてないのよー。」

「釣り合つ? なにが?」

「容姿よ! 貴女よりも私のほうが全然美しいわ!」

「え! ? お前つて美人なのか?」

「そうよ! !

「…………」の入ダメだわ。

「あー、お前らしあ。」

「何よ!」

「気合を入れて化粧するのはいいが、正直ケバい。
バイオ○ザードのゾンビみたいだ。」

クスッと鼻で笑つてやる。「なつ、なんですつ「わははははつ!」
ちょっと風雅君。」高嶋が笑い出し、他の男子も釣られて笑う。か
ろうじて早田は笑いを堪えてる。

他の女子も焦つてる。馬鹿みたいに「私つて大丈夫かな?」みたい
な会話を小声で話し合つている。

そんな女子どもを見て私も笑う。

浅倉は顔を真つ赤にして「ひつ、酷いですわ……。」の私を侮辱す
るなんて。」

「はあ……、先に私を馬鹿にしたのはお前だろ。因果応報つてやつ
だ。」

「…………つ! ふん。貴女つて本当に性格悪いわ。」「それが?」

短い切り返しに浅倉が言葉を詰まらせる。

「貴女つて「オイ、やめてくれ。」ちょっと慶君。」

不意に早田が言葉をはさむ。呆れたような声だつた。「浅倉さん、
いくらなんでも千遥ちゃんに言い過ぎだよ。千遥ちゃんもゾンビ

て言つちやダメ…… ププツ「ermen。」

笑いこらえるなよ。何げに浅倉にダメージ余計に与へてこぬじやん。
どりでもいこけど。

早田の説教?が終わつてから「あの、そろそろ時間だよお。」と金
髪馬鹿が言い、とりあえず合コンはお開き?になるらしい。

初めての合コンは結構不愉快だった。

一一四話（後書き）

バイオ○ザードのネタは学校に化粧してきた人が男子に影で言われた言葉です（ ）

私の学校の男子は薄化粧が好みらしい。（私はつねにすっぴんだ。
面倒だから）

カラオケの室内は熱気が籠っていて暑かつたが外はだいぶ日が暮れていて、寒かつた。

さつままで言い争っていた奴は「寒いわ 慶君。」と、言しながら早田に引つ付いていた。

早田は軽くあしらつてから私の方へと近付く。

なんだ?と思つてみるとおもむろにケータイを取り出すと、「メアド交換しなつよ。」と、言つてやった。

……浅倉は驚き、「私のメアドす?」と言つていたが、無視されてしまう。

「断る。」

「どうしてだい?」

「答える義理はない。」

「……やつ、じゃあ紙に連絡先書くからこつでも連絡してよ。」

紙を渡されたが、みんなの前で破り捨てる。

「必要ない。」と、言つて私はその場を立ち去つた。

駅に向かつ途中「ちよつと待ちなさい。」と、言つ声が聞こえて無視したが腕を掴まれる。

最近人を無視すると腕を掴まれるな……。

振り返ると浅倉が怒った顔をして私を見ていた。

「慶君の」好意をなぜ無駄にするのかしら。本当に貴女つて最低ね！」

「……あつ、言つ事つてそれだけ？」

「えつ？」

「そんなどうでもいこと言つたために追い掛けで来たの？」
「どうでもいいわけないですわー慶君の気持ちを踏みにじつていま
すわ。」

「じゃあどうすればいい? そろそろ帰りたい。」

「慶君に謝りなさい!」

「わかった。」

私は早く帰つて寝たいので早田のところへ行く。

「あー、ゴメンソ?」

「あ、ああ……。」

疑問形（しかも棒読み）で謝つたがいいみたいだ。キーキー後ろで
抗議の声が聞こえたが無視。

帰らうとしたらすつと何かを差し出される。

「やつぱり貰つておいてくれる?」と、メアドが書いてある紙を出
される。

いつの間に書いた? と、聞きたくなるが、まあいつか。

最近人としゃべることが多くて疲れた。早く帰ってゆっくりしたい。

そう想い、いつもより若干遅いペースで歩きだした。

ゆづくと歩きながら駅に向かいながら小さな紙を見つめる。ゆづくは、早田の連絡先だ。

字は、慌てて書いたらじこので少し下手くそだ。

連絡しなくてもいいよな、と思に破りつとしたら誰かが紙を奪い取る。

「誰の連絡先?」と、奪いとつた奴が言つ。

「ぐつに言わなくてもいいだろ。」

「えへ、じゃあ返さないよ。」

「いいけど。」

そんなやり取りをする。

「もしかして男?千遥も隅に置けないな。」

奴があちゃらけながら言つた。

「まあ、男だ。」

そう言つと奴は驚き、ふて腐れるような顔をする。

「連絡するの?」

「しない、面倒だ。」

「…………。」

「変だな。」

「えつ!?」「こつもなら『相手に連つてからちやんと連絡しなさい。』

『とか言つてゐるだろ?』
奴がなぜか黙り込む。

「まあ、どうでもこゝにけどな。」

私はとりあえず奴から離れようと早足で歩く。だけど奴はすぐに追いつく。

足の長さの違いを見せつけてゐるのかコノヤロー。

いくら頑張つても奴から逃げ切るのは難しいのでベースを戻す。

「千遙ー。」

「なんだ。簡潔に話せ。」「好きなタイプってどういう人?」

「……なんで聞くんだ?」「いーじゃん。」

「あー、わからない。」

「えつ? だつて自分の好きなタイプだよ。自分が一番わかつている
じやん。」

「人を好きになつたことがない。つーかなれないかもしない。」

「えー。」やや不満そうな顔をする。

「じゃあ顔で選ぶ? 性格で選ぶ?」

「どうでもいいけどな。」「じゃあ学力で選ぶ? 体力で選ぶ?」

「あー、体力かな? まあ私より頭いい奴もいるな。」「……千遙つ
て学年何位? 結構頭いいらしいけど。」「教えててもいいだろ。」

「じゃあ前の1番よかつたテストの科目は?」

「数学と化学だ。」

「スゲー、でもうちのクラスの崖下^{きしした}には千遙でも敵わないと思つよ。」

「誰?」

「クラスで1番頭がいいんだ。しかも3位だったのに学年2位にな

つたんだよ。凄くない？」

「なんだ、1位になつてないじゃん。」

「えー、でも1位の人は知らないな……。まあ多分2組のガリ勉君だよ。」

2組のガリ勉野郎は知つてゐる。模試で会つた奴だ。

「まあとつあえず」こんな無駄話はやめよつ。」と、言つて会話は途切れ。

「あつ、あつだ。」

私はそつと立ち止まつた。奴はどうしたといわんばかりに私の方を見る。

「なんで合コンをしていた私と同じ時間に帰つているんだ?・部活でもやつてこむのか?」

時間的に少しおかしい。学校が終わるのは3時半頃。2時間半くらいに空白があるぞ。

「ええつーああ……、聞きたい?」

「べつに言わなくていいがな。」

何かよくわからないが妙に焦つてゐる。

「そーいえば千遙つて最近悩み事つてある?・?」

「あるぞ。例えば勝手に誰かさんに『千遙つて浮ばれるし、最近うつとうしここののが付き纏つし、それから……。』」

つらつらと歎み事を言つてくとだんだん奴が暗くなつてこへ。

「千遙つて俺の事、どう思つてこるの?・?」

「面倒な奴

「つべつ……。」

あーあ、本格的にがっかりしていく。優しい子とかなら慰

めるだらう、がないにく私は優しくない。

「だつてそつちが勝手に私に近寄つただけだらう？」

「でもさー、心を開くみたいなさ、可愛いげがあつてもいいだろ？」

「野性の動物が懐くみたいな？」

「はあ？」

可愛いげ？ そんなもん焼却炉に捨てたわ。それ以前に私を野生動物だと？

「私は東京で生まれて4歳でこの町に来た。野生ではないぞ。」

「いや、例えだから……でも動物は否定しないんだ。」

「靈長類だからな。」「……？」

「ヒト類やサル類とかサル目の総称……、それくらい常識だろ。」

「ふつ、常識に囚われるのが俺のモットーだ！」

「……。」

「お願いだから人を馬鹿にするような田で見ないで……、少し傷つ
くから。」

「私には全然問題ないから。」

「俺に問題あるから。」

はあ、私はいつまで」こつと話しているんだ？

「そりそろ私はダルいのでしゃべるのをやめるだ。」「えつー。」

「……。」

「千遙、ねえ答えてよお話をうよお。本当に黙つたまま？」

「……。」

そのあと色々しゃべりかけたりつかれたりしたが私は黙り通した。

奴の悲愴な顔がたまらなく面白かった。

一十八話

家に着くと人の気配があった。泥棒？かと思つたが違つた。

「……千遥か。お帰り。」「帰つていたんだ。」

父さんがいた。いつもは深夜に帰つているらしいが稀にこの時間帯に帰る事がある。

「（）飯はこれからだけどいいか？」

「……ああ。」

適当に買つてあつた魚を焼き、みそ汁をつくる。ねぎを切つていてと、千遥、学校どうだ？」と、聞いてきた。

「成績はべつに変わりないぞ。」

「成績じゃない。人間関係だ。」

「関係ないだろ。」

はあ……と、父さんがため息をつく。

「社会人になるには人間関係を築くのが大切だ。お前のその考え方は正直、直すべきだ。」

「あーあー、ワカリマシタ。」

「あのなあ……。」

説教はやめてくれ。最近似たようなことを言われたから余計に腹立つ。

「父さんは……、仕事どうなんだ?」

「まあまあだ。」

「あ、あ。」

父は「この町の総合病院で勤務している外科医だ。たまに薬品の臭いがする。」

「そうだ。」

「何?」

「今月の生活費。」と、言つて金を渡される。

「多過ぎる、これの半分くらいでいい。」

そう言つたが、「余つたら自由に使っていい。」と言われた。

それで会話は終わった。その後は私が料理をする音が家のなかで響いた。

『飯を食つてから1時間経つて、なんとなくケータイを開く。メールが来ていた。あいつだ……、

『夕飯何食べた？俺の家は焼肉だよ』

『適當』と、書いて返信してあげた。少しうらやましいな。焼肉なんて私の家はほとんど食えない。

しばらくしてから『具体的に何食べた？』と書かれたメールが来た。面倒だな。『2日前に買ったアジの開きを焼いた物を1枚と目分量で作った豆腐とワカメのみそ汁と家にあつた野菜で作ったサラダとご飯1杯。あと昨日作った煮物と漬け物少々だ。』と、書いて送った。結構長文になつたな。

これにばっかりかまわっているのも時間の無駄だ。とりあえずシャワーを浴びることにした。

シャワーからあがるとメールが来てた。内容は『かなり具体的にありがとう（汗）あつ、料理出来るんだ。すごい』と書いてあつた。

……それくらい出来て当然だろ？と思つたので『当たり前だろ？』と、書いて送つた。少ししてからまたメールが来た。

『得意料理つてなに？』と書いてあつた。

あー菓子だな。だから、『お菓子だが文句あるか？』と送る。

『文句ないよ（^_^;）お菓子かー、なんか女の子らしいね。そうだ、なんか作つてほしいなあ（^人^）。』

『断る。』

そつ打つてケータイは放置する」とした。ちゃんとお詫びしたから怒らない……と思つ。

ケータイを使ってたせいで頭が痛い。もともと頭が悪いけど余計に悪くなつたらどうするんだと、思ついたら睡魔が襲つて来た。ちよつといこ時間なので寝ることにした。

三十一話（前書き）

ほんの少し暴力シーンがあります。
苦手な方は気をつけてください m(_ _) m

薄暗い教室の中で何かを持った少女が何かを言つてゐる。

「たがつ な ば！ ね……、 れつ……」

何を言つてゐるのかわからないけど凄い剣幕だ。少女の顔立ちはとても可憐らしいのに台なしだ。

その子は持つてゐる『モノ』を私へと振りかぶる。よく『モノ』を見ると、鋭利なナイフ。こんなのに刺されたらまらない、と思い腕で頭を庇つ。

だけどなぜか逃げられない。裏切られた驚きと絶望感が足止めをする。

なぜこんな感情を持つてゐるのか？と疑問に思つてみると腕に鋭い痛みが走る。

刺された、と思って腕を見ようとしたら殴られた。

少女の割に力強い一撃でナイフと違つた鈍い痛みで頭がふらふらする。

ナイフは少女の手に持たれたまま、殴られた衝撃でふらふらしている私にとどめだといわんばかりに振りかぶる。

クソッ、急所を狙われたらヤバいと思い体制を立て直す。

また腕で自分を庇う。そうするとヒュッと風を切る音がなりまた痛みが襲う。

何回も何回も切り付けられて……、段々感覚がなくなっていく。

不思議と血が流れる感覚がない。たくさん切られたハズなのに……。

頭がぼうつとなつて……。

* * * * * * * * * *

「…………ツー！」

時計を見ると午前4時を少し過ぎた頃だ。起きることも厭う。

だいぶうなされていたのか汗がぐつしょりだ。気持ち悪つ！

「シャワー、浴びたほうがいいな……。」

ぽつりと千遥は言つ。その腕には無数の痛々しい傷跡があつた。

(やつぱり友人なんか……必要ない。結局、他人は他人。誰も……。)

三十話（後書き）

龍斗「最近さあ……。」

千遙「なんだ？」

龍斗「更新遅くない？」

千遙「そりゃ作者が某15禁B-Lゲーにまつてしまつたからな。」

「

龍斗「えつ？」

千遙「まあ、腐つてる奴だからしようがない。」

龍斗「15禁……、18禁じゃないんだね。」

千遙「18歳未満だから。でもなんか興味津々うしょひつとまで！」

チツ、作者が來たな。」

作者「やめる！人の趣味を言うな。」

龍斗「否定しないんだ。」作者「だつてやつと買ったPS なんだよ！楽しくつて仕方がない。」

千遙「アホ作者だけどこれからもよろしく。評価・感想を頂けると嬉しいです……つて台本に書いてありました。」

千遙、台本言つのやめて欲しいです。……ぐすん（涙）

浴室から出ると4時半だった。

ぼんやり髪を乾かしながらテレビのニュースを見ている。

電車通学なので運行情報が大切なのだ。

しかし……、久しぶりに嫌な夢を見たな。朝から気分は最悪だ。

まあ、気分は切り替えが大事だ。

朝早く起きたおかげでゆったり過ごせる。

「よし、コーヒーでも飲んで落ち着こう。カフェインで自身を覚醒させないとだな。」

よく「コーヒー派か紅茶派とかあるけど私は紅茶が好きだ。コーヒーは眠気覚ましに飲む事が多い。

コーヒーを準備していると父さんが起きてきた。

「俺もコーヒー飲む。」「わかった。」

『おはよう。』のあこがれもなく唐突にそう言われたが、いつものことだ。

2人分用意しながら、朝食と弁当を作る。

「千鶴。」

「何?」

「トマトは入れるな。」

「子供っぽいな。医者なんだからトマトの栄養価を讚えて食えよ中年。」

「まだ中年じゃないから大丈夫だ。」

父さんは妙に好き嫌いがある。医者のくせに……。

とつあえず「コーヒーを入れて、朝食を準備し終える。朝食を食べるためには弁当作りは少し中断する。

トーストにオムレツ、サラダとシンプルだが、そこそこバランスは良い。

無言で朝食を食べていると「顔色悪い。」と、言われた。

「こつもこつな感じだ。」「やつなのか?」

医者つてこつこつのに敏感だよな……。

朝食を食べ終わり、弁当作りを再開する。弁当箱におかずを詰めて
いると、

「だからマト入れるなよ。」と、声が聞こえた。

「早死にするなら財産たくさん残せよ中年。」
「はいはー。」

つたぐ、二十一トマトは楽なんだぞ。隙間があつた時にさつと入れられるからな。
適当に詰め終わつたら洗い物を片付けなければ。

ガチャガチャと洗つていると父さんから声をかけられる。

「傷跡……。」
「……つー。」
「治らないな。」

私の腕を指さす。

「結構深かつたからしじうがないし。」
「……まあな。」

小学生の時に色々あつてそのまま……、とにかく跡は消えない。

「塞がつて、血が出なければ大丈夫だろ。全く痛みはないし。」
「……そうか。」

……最悪な夢見た後にこれを指摘されるとイラッとするな。

嫌な気分を飲み込むようにカップに残っていたコーヒーを飲み干す。

コーヒーはぬるくて不快な苦味を口に残した。

今日は本つ当に最悪だ。

電車では痴漢されるし、妙に先生に頼み事（雑用）を任せられる。

ただ、一番の問題は今起きている。

眼鏡の……、レンズが割れてしまつた。

6時間目の移動教室の後、教室に戻る時に眼鏡が少し曇つてゐる事に気づき、拭こうとしたら後ろから誰かがぶつかってきた。

落ちた時は割れなかつた。だが前から歩いて来た先生に思いつきり踏まれた。

バギイツとした音がした時に……、私は何が起きたのか一瞬わからなかつた。

それくらいショックなのだ。

踏んだ先生はぶつかつて来た生徒に罪をなすりつけていた。

確かに……、そいつが一番の原因だ。だがお前も気をつけろと言いたい。

とりあえず修理代をふんだくうつとしたが、あんまり貰えなかつた。

なぜか私にも責任があるとか言われた。

私はただ、眼鏡を拭いつと思つただけなのに……。

……眼鏡買おう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4570z/>

ひねくれ女子高生は面倒ですが何か？

2012年1月10日21時49分発行